

鞣しにより革に変えることのできる皮を原皮と呼びます。

この原皮になることができる物は、脊椎動物の皮だけです。

簡単に言えば背骨を持った動物の皮の事です。牛や馬や犬や猫などの哺乳類、ダチョウやニワトリなどの鳥類、ヘビやトカゲなどの爬虫類、カエルなどの両生類、シャケやサメなどの魚類です。背骨を持たないイカやタコやホヤの皮は原皮とはなり得ません。

原料皮

脊椎動物

- － 哺乳類 (牛、馬、羊、山羊、豚、鹿 等)
- － 鳥類 (ダチョウ 等)
- － 爬虫類 (ワニ、トカゲ、ヘビ、カメ 等)
- － 両生類 (カエル 等)
- － 魚類 (サメ、エイ、鮭、ウナギ 等)

しかし、実際に原皮として使用されているのは、牛、馬、豚、羊、山羊などの家畜の皮やダチョウやワニなどの皮です。

よくニワトリの皮を鞣せないかとの質問を受けますが、鞣すことは出来ますが、商品にするような物を作るのは難しいです。理由はコラーゲン線維の絡みと脂です。

ニワトリは食用に適する様に品種改良を重ねて現在の姿になっています。つまり、コラーゲン線維が十分に絡み、硬い皮となっていては皮ごとの食用には適しません。

又、脂を皮下に十分貯めて食味を増すようにしています。

一度、人工授精の精子採取用に飼育していた、かなりの長老のオスのニワトリの皮を鞣

してみたことがあります。

皮は一見、充分コラーゲン線維が絡んでいるようでしたが、脱脂を行い鞣すと薄くて強度のない革しか出来ませんでした。

鳥類の場合、革にするにはオーストリッチ等の様に、ある程度の厚度の有る皮を原料にしないと難しいので、あまり一般的ではありません。又、革にした時の形も重要な要素となります。

基本的に革を加工する時は、平面にして裁断します。鳥類の場合は、羽の部分は薄くて加工できないので除去します。

そして胴の部分だけを使用すると、非常に不均一な形の革となります。

両生類のカエルの皮も、ウシガエル程度の大きさがあれば加工可能ですが、近くの池にいる様な小さなカエルでは加工は困難です。

前述のオーストリッチも、カエルも、爬虫類の皮も、その皮の表面模様が面白いので鞣して革として使用しますが、実用的な革製品となると、形や大きさ、厚さ等の要素に加えて、安定供給できる原料であることが必要です。

幸い我々は食用として家畜を飼育し、定期的にと畜して食肉を得ているので、その皮も一定量確保できます。

中でも牛の皮は面積も大きく、厚さもあるので広く革として利用されています。

前回、原皮の呼び方が英語ではhideとskinに分かれる話を書きましたが、これは牛の分類で言う中牛あたりで分かります。中牛ぐらいまでの大きさの原皮をskinと呼び、それより大きな物はhideと呼びます。つまり、豚や

山羊、羊などの原皮はskinで、馬やゾウ、カバなどはhideです。

ここでは我々の使用している革製品の大
半の原料となっている牛の原皮の話をし
ます。

牛原皮が多く使用されるようになったの
は、大昔からではなく革の歴史の中でも近
代になってからです。それまで原皮として
利用していたのは、家畜として多く飼われ
ていた羊や山羊が多く、荷役用や採乳用に
飼われていた牛をと畜する事はあまり無
かったためです。

貴重な労働力である牛を食べるのは、事
故や老衰でその役目を果たさなくなった場
合だけでした。その労働力としての牛の使
命も、産業革命により機械にその地位を奪
われました。労働力から食用にその役目が
変わったのです。そうすると一定の数量が
定期的に確保できるようになります。

当時から現在でも同じですが、革として
の使用の一番多いのが靴用です。

靴用として種々の革が使用されますが、
一番痛み易いのが靴底です。常に地面に擦
られている靴底はすぐに磨り減って穴が開
きます。そこで厚くて強度のある革、即ち
牛革を靴底に用いる必用があったのです。

牛革を靴底に使用ようになってから、
牛革の製造が飛躍的に増加し、皮革製
造技術も大きく発展しました。

ヨーロッパでは特に厚さのある背中から
尻の部分と、しわが多く比較的薄い肩の部
分と、柔らかく薄い腹の部分原皮の段階
で切り分けて鞣す方法が取られました。

これは現在でもバット、シオルダー、ベリー
と呼び分けられ、別々に鞣されています。

中でもバットと呼ばれる尻を中心とした
厚い部位は、靴底用以外にも馬具の鞍など
厚く強度を求められる部位で使用されてい
ます。

仏教伝来以降、殺生禁止により肉食の習
慣から離れていた日本も、明治の文明開化

以降は牛肉文化が広まり、国内で地生^{じなま}と呼
ばれる牛原皮が入手できるようになりました
。

この原皮ですが、と畜後に剥皮^{はくひ}した後の
処理を「原皮の仕立て」と呼び、頭、足
先、尾等の革として使用しない部分を切り
取り、防腐のために塩漬けにします。

この塩漬け方法も国に依り異なります。

日本やヨーロッパでは振り塩と言って、
皮の肉面に塩を振りかけ、肉面を内側にし
て畳んで国内では輸送します。

一方、輸出する場合は再度塩を振り、毛を
内側にして畳み輸送します。これは輸送中に
皮の表面が傷まないようにするためです。

アメリカ等では原皮処理の絶対量が多い
ので、一度に多量の原皮処理のできる塩水
法と言って、食塩の飽和溶液の中に皮を漬
ける処理法が取られています。

食塩の浸透圧により皮中の水分が減った
原皮は冷蔵又は冷暗所貯蔵により保存され
ます。食塩で処理することで、鞣しのため
の水戻し工程での原皮の生皮への戻りが良
くなります。

牛革の価格の65%以上もの割合を占める
のが、原皮の価格です。

この原皮の価格もアメリカ国内ではUS
セント/ポンドですが、輸出では品種別、
重量別に分類後、USドル/枚となります。
EUでは品種別、重量別に分類後、ユーロ/
kgです。日本では品種別に分類後、円/枚
です。

原皮を買うタンナーでは冬に沢山の毛を
生やし、脂肪もたっぷり付けた原皮より、夏
場の牛の原皮の方が加工もし易いので好ま
れます。しかも輸入原皮は重量別に価格が
決まるので、革には不要の毛や脂を多量に
付けた冬原皮は割高となり好まれません。

しかし、原皮価格は相場制なので種々の
要素で変動します。需給のバランスや為替
相場など多くの変動要素を抱えているのが
現状です。